
マジカル・パニック ～杖とローブと魔術式！～

LICHT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジカル・パニック 〜杖とローブと魔術式！〜

【Nコード】

N3321B

【作者名】

L I C H T

【あらすじ】

魔法が存在する世界の、ある学校。そこを舞台に繰り広げられるのは、バトル、トラブル、はたまたロマンス？（未定）…とにかく頑張るファンタジー、今ここに、開門！！

プロローグ 伝説

——遙か昔、大陸を支配する偉大なる魔術師がいた。

その知恵で考えるは他人の苦痛、

その両手で潰すは他人の命、

その右手に握るは破壊をつかさどる杖、

そのローブは闇夜よりも深い、黒。

付けられた名は、『鮮血のジェノス』。

初め何の魔力も持っていなかった人々はただ虐げられ、殺され、辱められ、それでも耐えねばならなかった。

それから、幾千年も後。

ジェノスはその魔力が為に生き続け、彼の子孫達も人々の中に混じって暮らしていた。

しかし、それこそが、ジェノスの唯一の誤算であることに、彼は気付かなかった。

——科学しかなかった人々に、魔力を与えてしまったことに。

人々はジェノスの子孫……「魔力を持つ人間」達と手を組み、ジェノスの圧政に抗い始めた。

その集団の名こそ、我らが『神聖教会』（デイバ・チャペル）だった。

ブレイズ・イラ
閃暦5、619年、ついに両者は、衝突した。

神聖教会は人々が為、対するジェノス率いる殺戮者達ジェノサイタスは、ただただジェノス本人が為、戦った。

——世に言う、『スプリング・ジハード』である。

三千日三千夜にわたる激戦で、大陸は荒廃し、多くの国々が破綻し、そして何より、多くの人々が、死んだ。

莫大な量の被害に耐えて戦い続けた人々に攻められ、ジェノスはつ

いに、散った。

後に残った魔力は大きく、世界中の者達に分け与えた後も尚、ダイク・ルビーとして残った。

そのルビーは、神聖教会の者たちによってしかるべき所に封印された。

かくして人々は魔法を手に入れ、世紀の読み方も変わり、魔法の使い方を学ぶため、大陸の4箇所^ルに魔法学校が建造されたのである。

これが、1300年前の伝説だ――。

嵐の前・1～朝～

マジカルイラ
魔道世紀13、元年。とある大陸の、西の最果て。西の魔法国家ベ
ヒュージスベルシティ
テリスの大魔法都市、セレスティアの海岸。そこに、神聖教会立サ
ークライド大魔法学校があつた。

——現在時刻、6時50分。朝日に照らされて白煉瓦の城壁が輝
いている。その頑丈そうな壁や塔の間を縫うようにして、強めの潮
風が木々を揺らす。

——現在時刻、7時15分。潮風は市街地へと向かい、まだ人通
りの少ない本街道を駆け抜けていった。…一軒の店の前で掃き掃除
をしていた老人が、ふと手を止め、

「ああ、今年も精霊の大移動の季節がやってきたか…」

とつぶやいた。

『カランコローンカラン………』

サークライドの時計塔が、始業時刻を告げる鐘を鳴らした。その音
色は魔法で拡張され、セレスティア全体に例外なく響き渡った。

「う、うん…」

ある一軒の家の寝室。ものすごくふかふかであることが見るだけで
分かるベッドの上で、1人の青年が寝ていた。
青年は寝返りを打つ。

その青年の眠気とは裏腹に、情け容赦なく鳴り続ける鐘の音。

「あゝ、もう、分かってるって…もうここにいるからさあ…」

——救い様が無い位、寝ぼけている。

しばらく後、青年——グレイ・フランシスは、目を開けた。

一瞬。

「——って、」

正気に戻ったグレイは、時計を見て…

「……………ッ遅刻だああああああああつ!!」

…叫んだ。

嵐の前・1 授業前

数分後のサークライド敷地内、中庭。

その隅の方にある大きめの植え込みが、ガサガサと不気味に揺れた。

「ニヤア。」

そこから出てきたのは、鳶色の目をした1匹の黒猫。辺りをうかがうように見回した後静かに移動を始めた。

刹那、

「グ〜レ〜イ〜」

「ニヤツ!？」

東洋系の美少女に猫は捕まった。身を擦じらせて逃げようとするのも敵^{かな}わず、頬擦り付きの抱き締めを喰らう。

——マンガ化したら確実にハートマークだらけになりそうな、微笑ましい情景。

「ニヤめろニヤめろ、苦しい!!」

「だつてえ……。」

「エリス!頼むから!」

はい、と少女——エリス・リベライトは腕を緩めた。そして植え込みの陰に座る。

「——つたく、ニヤんで俺の変身してる姿が分かったんだよ?」

「だって、どんな姿になってもその鳶色の目だけは変わんないんだもん。」

「仕方ニヤい。元の姿に——」

「え、駄目。」

「ニヤんでだよ？」

「そっちの方が可愛いから。」

「そんな理由で……」

突然、エリスは猫「に」変身したグレイ・フランシス」を持ち上げ、自分の顔の目の前にその顔を持ってきた。

「……今変身解いたらキスしちゃうよ」

「それは変身を解かない理由にならないような……。」

「……キスしたいの？」

「え、そりゃあちよつとは……ってオイ……！」

「そういえば、何でこんな姿してたの？」

「スルーかよ。」

「……キスしようか？」

「もういいよ。……先公に見つからニヤいようにこんニヤ姿で『移転』してきたんだ。そうニヤン回もニヤン回も書き取り罰ニヤンて受けてられニヤいつての。」

ここサークライドには、校則違反者に魔術の基本、『魔術式』を書かせるという伝統的な懲罰があった。無論毎日遅刻するエリスやそれに喫煙や飲酒まで入ったグレイは、毎日のようにそれを受ける羽目になっていた。余りにも2人つきりでよく顔をあわせて真夜中までこの懲罰を受けていた所為か、お互いに同じタイミングで告ってしまうと言う珍事態が発生したことは、教師陣の中では有名な話である。……未だに目撃者は不明だ。まあ、エリスと言う恋人が出来たお陰でグレイの素行が明らかに改善したのは紛れもない事実なのだが。

エリスはしばらくの間黙ってグレイをなでる。

あごの下や耳の裏…これがまた、猫にとっては気持ちいいのだ。
グレイは無意識にのどを鳴らしてしまう。

「可愛い♪今日はもう帰って寝床で抱いてようかな？」

「せっかく学校に来た意味が…ってか変身は12時間しか効かニヤ
いんだぞ？」

「解けたら…んん…まあ、そういうことするの」

——何だそういうことって、と聞きたかったが、やめておく。ど
うせろくなことじゃない。

…あのポニーテール風の黒髪のある頭で何を考えているのやら。

「1『次元』目ってなんだったつけ？」

「…魔闘術、じゃニヤかったか？」

魔闘術。自らの魔術の腕を鍛え、それで試合を重ねていく科目だ。
書き取り罰のお陰で多くの魔術が使えるようになった「通常魔術を
使えるようになるためには、体が覚えてしまうまでその術の魔術式
を書き続ける必要がある。」2人にとっては、得意中の得意だ。

「じゃ、帰る前に受けなきゃね。」

「…帰ることは決定済みニヤのかよ。」

「うん。」

「……。」

エリスの事はグレイでも時々分からない。

「じゃあ行くよ、『魔術式、段階2、展開！』」

2人、正確に言うと1人と1匹の足元に、淡い水色の簡素な魔法陣、

ペンタクルが現れた。

「『「移転」、発動！…コロセウムへ！…』」

1人と1匹の視界が、光に包まれた。

そのときのどこかで

1

ガードィアン
守護者、キム・ステイルレイトはタバコをふかしていた。
頭上は抜けるような青空。そしてニコチンの混じった煙。

「…暇だ…。」

キムの職業は、ここ神聖教会立サークライド大魔法学校の門番である。とはいえ、治安のいいここは、全くといっていいほど侵入者はいない。

——つまり、給料泥棒もいいところなのだ。

普段は不慮の事故を想定して手の空いた教師が来るはずなのだが、今日はまだ誰も見ていない。まあ、だからこそこんなにも長いことタバコを吸っていられるのだが。

物見やぐらの縁に足をかけ、白い制帽を目の位置まで下げた。

「寝るつもりか？」

はて、とキムは思った。いつも巡回に来る仲間や、見慣れている教師の声ではなかった。しばらく考え、幻聴だと言う結論に至る。

辺りには風ひとつなく、音もまた然り。居眠りには申し分ない感じだ。

「…もう一度聞こう。寝るつもりか？」

一回目よりもはっきりと、そして脅しの雰囲気まで加わった声が聞こえた。

キムは舌打ちし、制帽を普通的位置にする。

「誰だ？」

「旅のものだ。」

「冗談だろ？」

ここまでしゃべってようやく物見やぐらから門の前を見た。

——真つ白な壁に、鮮血のモダンアート。

派手に飛散した真紅の飛沫^{しぶき}が鮮烈な印象を放ち、
ガディアン^{ガードイアン}守護者の制服だったのであろう血染めの白布が散らばっている。
良く見てみれば、城壁の血しぶきの中に点々と、

臓物が。

「だ、誰だお前は！？」

「何度も言わせるな。ただの旅のものだ。校内に入れてくれないか？」

「冗談じゃない。」

アイツ…俺の同僚の生首持ってやがるじゃねえか！！

「分からぬか、開ける。」

「何を——」

「開・け・ろ。」

「クソッ——」

ダッ、とキムは飛び降りる。

ここで、いつも怠けていたが故の失敗をしたことに、彼は気付かなかった。

警報を、鳴らし忘れたのだ。
飛び降りざまに、唱える。

「『魔術式段階3展開、召喚^{ローブ}胴衣装着！！』」

キムの体が光に包まれ、真っ赤なローブに変化した。

「『「不壊の捕縛鎖」…発動！』」

「——」

生首を持った男は黙ったまま魔術式から伸びてきた鎖に絡まれた。

「どうだ！もう逃げられまい！！」

「——」 『段階に——』

「馬鹿か？こっちは段階3だぞ？」

「『——段階23、…光臨。』」

ズバァン、と鎖が勢い良く弾けた。

キムは耳を疑いつつ絶句する。

——段階は10までしか存在しないはずなのだ。

「大人しく従えば命だけは助かったものを…。」

「クツ…『盾！』」^{シールド}

唱え、術が発動…しなかった。

「所詮それも段階3…哀れな男だ…生まれ変わって来い、^{スクアッシュ}粉碎。」

「——」

キムの意識は、砕かれる肉体と共に消えた。

「——参ったな。」

人肉のミンチと返り血まみれの男はつぶやいた。

「自分で開けるしかなかった…。」

男の目の前には、サークライドの巨大な鉄扉がそびえていた。しばし躊躇する。

「まあ、多少手荒いが…。」

溜め息をつきながら右手を上げ、

「『サイレント・ビッグダット静かなる大爆発、点火!』」

城壁ごと、粉碎した。

そのときのどこかで 1（後書き）

今まで頑張って書いてきました。

まだまだ続くので、よろしく願います。

感想やアドバイスなど、そちらの方のご協力も願います。

少し時間は戻って*1

フィールド型闘技場、コロセウム。乾いた風がどこかの草原のはずれを思い起こさせる風景の中を駆けて行く。

その真ん中に、1人の少女が佇んでいた。

フラチナフロント
風に白髪の長髪をなびかせ、ただ静かに、目を閉じている。

そこから半径50メートル位の範囲で、サークライドの10年生達が輪を作っている。

「『ロープ召喚胴衣装着』」

白髪の少女が唱え、両腕をゆったりと広げた。

——彼女の体と同じ形の薄い光の膜が張る。

刹那。

「貰ったあああああつ！！」ヘルズファイア「段階5、「業火」レベル1、発現！！」

「

1つの岩陰から野太い声と共に何者かが躍り出た。

朱色に輝く大仰な魔術式が少女を囲むように構成され、発火する。

「——っし！」

燃え盛る紅蓮を見ながら、先程の青年は勝利のポーズを取った。

が。

その紅蓮は、一瞬で霧散した。

「なっ!？」

炎の中から現れ出た少女の姿。魔術師の本気モードである、ローブ着用後の姿。

燃え盛る炎を具現化したかのような黄色の文様をあしらった赤い東洋風の胴衣。その脚部にある切れ目から、ただひたすらに鮮烈な蒼色のローブが見え隠れしている。先程よりもさらに強い風にあおられ、白髪が大きく広がっていた。

——その容姿はまさに、戦うために地上に光臨した天使とでも言えそうだった。

ゆつくりと、少女の瞳が開かれる。

スカイグレイ
灰青色の瞳。先程の名残であろう、宙に未だ舞い続ける火の粉が、それに映る。

思わず、青年は1歩退いていた。

少女はそれを見て、伏目がちに、言う。

「この姿を見て退くぐらいなら、始めから挑戦なんかしなきゃいいのに…」

明らかな…侮蔑の念。

「戦うのは、好きじゃない。なのに、私を無理に引つ張り出して戦わせて、最後はそれ?…私を疲れさせないでよ、アーノルド・アスマン」

タン、と地面を蹴って浮上する。

「ふう…お望みなら、この『神童』と呼ばれる私が本気を出してあげてもいいけど?その代わり、私怒ってるから手元が狂うかも知れないってこと、警告しとくね。」

「…望む所だ、レルナ・ウィルゼブル!」

アーノルドはそう答え、レルナは眉をひそめた。

「正気？」「正気だ」「へえ……」

3秒にも満たない、即答のやり取り。
一瞬の、後。^{のち}

「『我が哀しみは 空へ帰す。汝の御許に 羽は舞う。我が右手には 杖在りて 汝が望みを 打ち据える——』」

レルナが朗々と何かを唱え始めた。

「！」

風向きが、変わる。

今や風は全て、レルナを中心とした渦となっていた。

その風の一部が、レルナの右手の中で1本の純白の杖と化していった。

「『敵が野望^{のぞみ}は 陽に焼かれ 悪しき魂 砕け散る。天の衣は 千切れ飛び 清めのために いざ舞わん——』」
「レルナ、お前……！！」

——杖の召喚と同時に、闇殺しの呪文を……！

普通そんな芸当は、出来るはずがない。魔術式が複雑すぎて呪文の方が発動の主流になってしまうような強力な魔法は、凡人にとって簡単には扱えない。

それを涼しい顔でやってのける。…レルナが『神童』と呼ばれるゆえんである。

「『——段階9、「スカイ蒼穹の片鱗」レベル4、発動!』」
「わ、だ、『段階5、ハ大いなる壁」、ググレイテスウォール」発動!——!」
「——遅い」

かずあまた数数多の蒼い刃が、アーノルドの周囲を抉り、

——花火でも打ち上げたかのように、アーノルドの鮮血が宙に舞った。

ぼとつ、と妙な音を立てて倒れたアーノルドを見ながら、レルナはつぶやいた。

「ま、長く持ったほうではあるかな……」

あくまでも、挑戦者には優しくない天才少女なのである。
ふと、中庭の方向を彼女は向いた。あくまでも方向であって、実際に見たわけではないのだが。
そして唐突に、その顔をほころばせた。

「来たんだ、アイツ…また遅刻だけど」

ドタバタとした日常が始まったんだと、レルナは予感した。

少し時間は戻って*1（後書き）

意味不明な文章の塊です。ここまで読んでくださった方、どうもありがとうございます。ぶしつけですが、アドバイス等、よろしくお願いします。

嵐の前・1～エリスの戦い・前編～

数分後のコロセウム。その中で、2人の少女が対峙していた。

「『段階4、「^{ビジョン}幻夢」展開！！』」

「そんな物！『段階4、「^{サンクチュアリ}聖域」発動！』」

コロセウムに桃色と水色の光が交錯する。

いかにもお嬢様育ちといえそうないでたちの茶髪の少女が、黒髪の少女がよろけるのを見、叫んだ。

「とどめです、『段階5、「^{フィナーレ}紫色の最終楽章」「^{アメシストス}紫水晶」！』」

紫色の炎で出来た水晶のようなものが、地を砕いて伸びる。

「あなたごとときには負けない！『段階5、「小さき羽毛達の乱舞」（フェザーズプリーイング）開放！！』」

黒髪の少女を包み込むように白い羽が回り始め、怒涛のごとく先程の水晶へと雪崩れかかる。
白と紫は相殺し、消えた。

「ハア…ハア…。や、やりますね、エリス」
「そっちも…ね」

そして2人同時に、

『^{ロープ}召喚胴衣、装着！！』

茶髪の少女、エマ・イリアスは耽美的少女調の黒いローブ、対するエリスも漆黒のマントを羽織っていた。そこには、デザイン化された蝶が1匹、紫色に描かれている。

「変わったローブですね」

「お褒めの言葉をありがとう、エマ」

今の所、エリスの方が優位に立っている。本来の魔闘術の授業では、相手が気絶するか降参する、もしくはコロセウム外に落とすことで勝負が決まる。そして今、エマは崖っぷちに立たされているのだ。

「ニヤ」

「ひゃっ!？」

突然、1匹の黒い子猫がエリスの服の胸元から飛び出した。エリスは驚いて声を上げた。

「な、なんだ、グレイか。……脅かさないでよ」

鳶色の双眸を持つ子猫。それはエリスの肩に乗り、喉を鳴らした。

「コロセウムにペットは持ち込みOKなの？」

「そんニヤ事より、」

「!?!?猫がしゃべった?」

横からのエマのツツコミを気にも留めず、子猫はエリスに語りかける。

「やつのローブ、かニヤリ複雑だ。それが意味する所、ニヤにかは分かるよニヤ?」

「えと……遠距離戦闘タイプ、ね」

召喚胴衣、ローブ。これは、召喚主の魔術のタイプによって姿を変える。細かい魔力の制御が主体となる遠距離・補助魔法を得意とする人間のローブはエマのように複雑で、対する近距離魔法を得意とする人間のものは、至って簡素である。ちなみに、エリスはどちらも得意なので、好みに合わせて召喚できる。

「……接近戦で片を付ける」
「ン、分かった」

エリスは相槌を打ち、両腕を広げた。

『闇夜の宙に、月浮かぶ。我が魂は、六連星。北の光は、我が右手。汝が行く道、指し示さん——』

エリスの右手に、漆黒の石で出来た短い杖が握られる。

魔術の力の差、段階。通常1〜10まであり、それら全てが魔術式もしくは呪文で発動できる。その中でも特に上位魔術と呼ばれる段階6以上の魔術を扱う者は、個人特有の『杖』を持つことが出来る。エリスもその一人、『杖持ち（ワンドホルダー）』なのだ。

「覚悟してね、エマ」

余裕の笑みを見せながら、エリスは止めを刺す体制に入った。
が。

『空に日輪、ただ1つ。全ての光を、統べんとす。星の明かりは、

弱きにて。月の光も、弱きにて。闇を払いし炎の光、我が右手にて、杖となる――」

「ニヤに！？やつも杖持ちだと！？」

「ど、どうするのグレイ！？」

一瞬だけエリスは躊躇した。エマはそれを見、ニヤリ、と晒^{わら}った。

「燃え尽きなさい、『段階6、^{ヘルズファイア}業火』レベル2、発現！！」

「しまっ――」

「『段階8（シャープ）！』『削除の氷雪』（デリーティングブリザード）発動！！！！」

轟音。

破裂音。

魔力の奔流。

1秒経ち、5秒経っても何も起こらない。エリスはそこでやっと、伏せていた体を起こし、見た。

――自分の目の前にある、銀髪の青年の後姿を。

「変身、解除……」

エリスの知る限りの最強男子、グレイ・フランシスだった。

嵐の前・1～エリスの戦い・前編～（後書き）

長いことお待たせしてしまいました。
やっとこさ更新です。

マリンブルーのロングコートが、一陣の風と共に、現れた。

「ちょっと、待つ——！！！」

「止めだ！！」段階8、「デリーティン——」

「待ちなさいって言っているでしょう！！！！！！」

「なっ、」

エマの気迫に、グレイが固まった。

「2対1じゃあ明らかにルール違反でしょう！？こっちも誰か用意しないとイケませんよ！！」

『ア……………』

エマは「そら見たことか」とでも言いたげに鼻を鳴らし、両手を腰に当てた。

（大人になったらものすごく鬱陶しいおば様になりそうね…………）

——なんて、エリスは考えていることも露知らず。

フリーズ状態からリカバリーしたグレイが、尋ねた。

「で、誰を指定するんだ？」

「勿論——、」

と、ここで一拍

「——私の専属ガーディアン、オーヴェルト・リヒトホーウェンです！！」

「アイツかよ…………」

「さあベル、来なさい」

「承知しました、お嬢様」

10年生の生徒達の群れの中から、何やら白ずくめの男が現れた。
漆黒の双眸に、これまた漆黒の短髪。見るからに根っからの東洋人でござい、な青年だ。

動きが滑らかなくせに、態度が妙に口ボっばい。と言うか、エマに完全に忠実だ。時々エマに本気で惚れてるんじゃないかと思ってしまつくらいの忠実さだ。

ま、気にしないで越したことは無い。

コロセウムの範囲内に入って、オーヴェルト、通称ベルは、エマの方を向いた。

「どちらを……」

「ベルは 그레이 を、私は エリス を殺^やる。あと、私の援護をお願い」
「分かりました、お嬢様」

そして 그레이 の方を向き、

「お嬢様の命により、戦います。……ご容赦」

「態度はエマがいなくてを標準にしてくれ。やりづらい」

「分かりました。では、参りましょう」

「望む所……」

「『絵札覚醒！』^{カード}「道化」^{ピエロ}、始動……」

ベルの周りに、唐突に無数のカードが現れた。

ベル——オーヴェルト・リヒトホーウェンは、基本的に魔術式を使わない。魔術師の特種魔術形態、「道化」を使いこなすのだ。魔術の覚醒を促す紙……「絵札」^{カード}を使う姿は、まさにピエロと言つにふさわしい動きなのだ。

「覚醒^{めざ}めよ我がルーン！第1開放、『力』^{ウルズ}……」

「『段階3、「不壊の捕縛鎖」発動!!」」

魔術式がベルの足元にひらめくのと、1枚のカードがベルの手元に入ったのは、同時だった。
が。

鎖に巻きつかれても尚、ベルは動いていた。

「ムダです 그레이、第1開放、『分離』!!」
オシラ

——鎖は、銀色の粒子となる。

「ちッ、鬱陶しい、『段階5、「業火」レベル1、発現!!」」
ヘルズファイア
「第2開放、『防御』『流』!!」
エイワス ラグズ

ベルの手の中で2色の魔力の色が弾け飛び、地面からの炎がいなされた。

「第1開放、『戦士』!!」
ティワス
「——っらああ!!」
「技術、『打払』!!」
ワンドスキル ウィスラ

그레이は杖を胸の前で交差し、魔力を溜め、思いつきり薙ぐ。
ギヤアン!!—と言っ反響音と共に、 그레이の2メートルほど右に、
 袂れが。

「ああ、面倒くせえ……」
「それなら、」

ベルはタン と地を蹴り、

「一瞬で——」

エメラルドグリーン

青緑色の光を帯びたカードを空中で手の中に呼び込み、

「終わらせて上げます!!」

そして、

「――『ハガラス破壊』!!」

グレイは防御する間もなく、地面に叩き付けられるのを感じた。

エリスの戦い（中篇）・血脈

エメラルドグリーンの光。

轟々とする、破壊音。

そして、衝撃。

「な、何!？」

エリスは思わずその方向を見ていた。

まるで隕石でも落ちてきたかのようなクレーターがフィールド上に出来上がり、エメラルドグリーンの光の破片が残り火のようにちらついている。先程の乾いた風とうって変わった潮風が、土埃を巻き上げ、どこかへと運んでいく。

そのそばで静かに佇んでいたのは……………

佇んで、いたのは。

グレイ、……………では無く。

オーヴェルト・リヒトホーウェン。

「嘘……………」

エリスは驚愕する。

「グレイが、負けた？」

「どうやら、」

エマが不敵な笑みを浮かべて言う。

「——そうですね。それにしてもベル」

エマが佇んでいる白装束に話しかけた。

「何でしょうかお嬢様」

「『破壊』^{ハガラス}を使っちゃうなんて、あなたに似合わず相当本気だったみたいですね」

「あれ以上長引けば、勝利は約束されませんでしたから」

「…正しい選択ですね」

「お嬢様を守れば、意味がありませんから」

そう言いながら、ベルはエリスに向き直った。

少し湿った潮風が、ベルとエリスの黒髪を、揺らす。

「初めまして、」

柔和な微笑を浮かべながら、ベルが。

「——『裏切りの血族』、リベライト嬢」

「！」

『裏切りの血族』……エリスはこの単語を、母から聞いたことがある。

1000年の昔に起こった、「鮮血のジェノス」復活未遂事件の首謀者の一族。

それすなわち、ジェノスの流れを汲むものの1系統。

黒髪に漆黒の瞳、そして女系家族——正にリベライト家そのもの。

エリスは答える。ベルの一族、その裏社会名^{ネーム}を言うことによって。

「何が言いたいのかな？告白はお断りよ、『道化師一族』」
「お嬢様、」

「なんですかベル？」

ベルは冷たい瞳でエリスを睨みつつ、言う。

「この女、僕に殺らせて下さい」

「あー、きれちゃいましたか、じゃあ……」

エマさえも冷たい微笑で。

「存分に殺りなさい」

「御意」

「グ、 그레이！！」

「ムダですよ、エリス。…彼の『破壊』は、生身の腕や脚の1本2本、いとも簡単に粉碎してしまいますから。意識など、もつはずがありませんよ？」

「そ、そんな……」

「『絵札覚醒。』『道化』、始動……」

「ま、『魔術式段階5、展開！！』」

「覚醒めよ我がルーン。第1開放、『分解』」

그레이のローブと同じマリンプールの光をまとったカードが魔術式に刺さり、式を消した。

ベルの周囲を高速で数多のカードが舞い飛んでいる。

「第3開放、『完全』、『光』、『束縛』……『完全なる光の束縛』！」

鈍色、金色、若葉色の光がベルの手の中で弾け、幾本もの光で出来た鎖へと変貌し、何も出来ないエリスへと絡みついた。

「う、うあああああああ…」

苦しい。

エリスは悶えた。

「元々が闇の血脈ですからね……さぞかし苦しいでしょう」
「く、う……」

「僕もお嬢様も、」

苦しみ悶えるエリスを楽しむかのような視線を浴びせかける。

「闇の血脈には、かなりの恨みがありました」

「——！、あああああつ！？」

ベルが指を鳴らし、どんどん締め付けを強くしていく。

「本当は首でも落としてやりたいところですが、生憎と、ね……」

魔闘術に、殺しは禁物。

——ただし、相手が降参しない限り何をしても構わない。

降参できなくすることも、含め。

「今のあなたに、降参の声なんて上げられますか？」

「こ、うああああああつ！！」

「ま、せいぜい気が狂うまで苦しめてあげますよ」

（グレイ、助けて……！）

エリスはただ、祈った。

「…叫ばなくなりましたね」

再び指を鳴らすベル。

余りの苦しみに、エリスの体が痙攣する。

それでも、耐えた。

涙や涎が溢れているのが、エリスにも分かった。

そして。

「きゃあああああああつ！！！！」

「――！！、お嬢様！！」

マリンプルーの炎が弾け、エマがフィールド外に落ちた。

エリスにかかっていた苦痛がふつ、と和らぎ、エリスはくず折れた。

「今は、段階１・・・？」

「その通り、ベル」

「！！」

いつの間にか、ベルの頸に 그레이 が腕を回していた。

エリスは声を出そうとするが、出ない。

「よくもエリスをこんなにしてくれたな……高くつくぜえ？」

「りよ、両腕を破壊したはず…ッ！？」

「まあまあ、そんなことより、」

그레이 は勢い良くベルの背中を蹴った。

エメラルドグリーン の光が足先で炸裂し、ベルは派手に飛んだ。

「（死んでないけど）弔い合戦と行くつじゃあ無いか。」

一陣の風が、互いの服を揺らした。

エリスの戦い（後篇）

「『魔術式段階9、構築！！』」

グレイの足元に、白く輝く魔術式が構成される。

前もって魔術式を展開しておき、それに魔力を支払い続けることによって、頭の中で魔術式をイメージする分のタイムラグを抑える。グレイは、早めに片を着けるつもりだった。今自分の真後ろに横たわっているエリスの鎖による傷は、深い。

——人が気絶している間に、散々やってくれたベルに手加減するつもりなど、皆無。

「『並べよ我らが兵士達！強大なる敵前にして、血路を開き突き進め！』」

まるで土星の輪のように、コバルトブルーの裏面を上にしたカードたちがベルの周りに並んだ。

「似合わないから嫌いなのですが……『召喚^{ローブ}胴衣装着！』」

白装束の上に、黒と赤のギンガムチェックのローブが現れた。

……確かにミスマツチだ。

「『段階5、^{ヘルスファイア}「業火」^{レイヴス}レベル1、発現！！』」
「第2開放、^{エイワズ}「防御」^{ラクス}「流」……『流れる防御』！！」

先程と同じように炎がいなされ、無数の紅い粉となる。

その粉にベルが視界をさえぎられている間に、グレイは杖を袖の中に入れ、前屈みになりながら両手首を顔の前で交差させた。

「『連続魔法！ 段階8、「大いなる翼の狂乱」（フレンジードプルミーズ）、発動！！』」

斬^{ザン}、という音と共にグレイの背中に1対の巨大な茶色い翼が現れた。

「『散れ！！』」

一瞬にして翼は1つ1つの羽に分離し四散、めいめいがタイミングをずらした時間差攻撃を開始する。

「くっそ……第1開放『休止^{イサ}』！！」

魔力を含んだ銀色の風が広がり、羽が宙に浮いたままぴたりと止まった。

数多の羽が、密度の薄い壁となる。

「このときを待っていた！！『段階8、「削除の氷雪」（デリーディングブリザード）、発動！！』」
「第2開放、『完全^{ソウェイル}』『防御^{エイワス}』……『完全なる防御！！』」

フィールドが魔力の吹雪に見舞われ、あらゆる魔法が魔術的絶対零度に耐え切れず砕けた。

——そう、あらゆる魔法が。
ガラスの割れるような鋭い亀裂音がグレイの耳に聞こえた。

「な、何ッ、防御が……ッ!？」

そんな声を上げるベルにも吹雪が襲い掛かる。

「『キャンセル解除』」

そう唱えた刹那、吹雪が完全に消えた。

吹雪の中で砕けずに残ったのは、ベルのみ。

その身にまといつていたローブの半分は、千切れ飛んでいた。

半分が黒と赤、もう半分が白装束と言う奇妙な格好でベルは立っていたのだ。

しぶとい奴、とグレイはつぶやいた。

「『魔術式段階9（フラット）、構築！！』」

「何、——！？」

驚くグレイをよそに、泡のような光を放ちながらクリーム色の魔術式がベルの足元に構築される。

「『段階9、スフィア・プロミネンスユニット「珠玉紅蓮」発火！！』」

右手を天に掲げたポーズで唱え、数瞬後にはもう、直径25メートルはあるつかという巨大すぎる炎の塊が手の上10メートルの辺りに出来上がっていた。

両者の距離、わずか6メートル弱。その球が手を離れたら即、黒焦げになってしまう。

「ば、馬鹿かお前はっ！？」

そう叫びつつ、とりあえず逃げるために上空へと逃げようと銀無垢の2本の杖を邪魔にならないよう1本に合体させ、唱える。

「『段階3、キャントシーウイング「不可視翼」発動！！』」

「喰らええええええええっ！！」

「本気で投げる奴がどこにいるんだあにやろうン野郎、ワンドスキル ウィスフ『技術、薙払！！』」

野球のバットのように、もとい古代の薙刀のように杖を持ち、タイミングを合わせて勢い良く、振る。

巨大な炎の塊は逸れ、校舎の北西塔に——激突した。

「あちゃあ……」

炎を上げながら崩れていく校舎の一部を、コロセウムの皆はただ呆然としてみていた。

エリスの戦い（後篇）（後書き）

サブタイトルがエリスの戦いなのにエリスの出番が少なすぎましたね．．．．．。

かなりの轟音と思しきものが遠くから聞こえ、建造物全体が、微かに揺れる。

男はその城の中を悠々と、且つ静かに歩いていた。

今は授業中なのであるう、大講堂のすぐ前の廊下を歩いていてもわずかの人間としかすれ違わず、すれ違ったとしてもこちらの雰囲気には押されて、避け気味なそれとなっていた。

いつ見ても美しいな、と男は思う。かなり見栄え重視に設計された壁や柱、そしてステンドグラスは、緻密な計算なくしては有り得る事の無いくらいの繊細さで、日光をも装飾品の1つとしてしまっている。科学が廃れ気味になっているご時世で、ここまで科学で美しく形作られている建造物は、今のセレスティアには無いのではないか。

——角を曲がり、中央へと続く大階段に足をかけた。両脇のステンドグラスが、柔らかく色の付いた光を投げかけている。

…… 此処を去ってから、もう何年になるのだろう。男はそんな回想を続けながら、階段を上り終えた。

一直線に伸びている大理石の廊下がそこにはあった。その先の丁字路の中央には、目的地へと続く階段のうちの1つを守る門がある。

と、

その右側の曲がり角から、1人の女性が歩いてきた。

長くさらさらと流れるようなブロンドの髪に、どこかの制服にありそうな、真っ白なツー・ピーススーツ。そして、やや童顔気味の整った顔立ち。

男の記憶に、その姿が妙にしっかりと引っかった。元クラスメイト、リズ・オーステンだ。

しかし此処で懐かしい人間に合えたからといって、安易に歩みを止めるような状況ではなかった。急がなければならず、声をかけて昔の思い出に浸ろうと言う暇は無いのだ。

ツカツカと歩きつつ、意図してまっすぐに前を向く。……向こうもまた、然り。

そしてゆつくりと、互いにすれ違った。

——近すぎた。安全にすれ違うには、余りにも近すぎた。

マントにべったりと付いた血液や脳漿の鉄臭い臭い、それが彼女のシトラスミントの香水の香りヨロシと混ざり合い、互いの鼻腔に、入った。

「——曲者、」

凜としたソプラノボイスが、柔らかな沈黙を打ち砕く。

「私を呼んだか？」

わざと気取った対応を試みせる。

「その独特な血の臭い……人を、殺しましたね？」

ブルーの瞳で男を睨み、ずい、と1歩前へと踏み出した。

恐らく今かけている黒マントのフードのせいで、自分が男の知人であることに、気付いていないのだろう。その眼光から読み取れる意思は、明らかに未知の侵入者に対するものだった。

「——もし、そうだとしたら？」

「『ロープ召喚胴衣装着！』」

リズは蒼いラインの入った純白のドレスを身に着けた。

「私達の生徒に、手出しはさせません！」
「ならば、止めてみる」

男は黒マントの裾を翻した。

「『段階4、「ムゲンセンコウ夢幻穿孔」、召喚！』」

空中に展開された魔術式から、1本の鈍色の短めの槍が伸びる。

「『段階3、「不壊の捕縛鎖」、発動！！』」

男の足元に魔術式が浮かび上がり、そこから幾本もの鎖が、

「無駄だ！『ゲン幻！』」

鎖は実体の無い男の映像に絡みつき、空振る。

「『セン穿！』」
「！！！」

リズは飛び上がり、それまでそこにいた床が抉れた。
そしてうずくまるように着地。
着地して、……隙。

「『コウ孔！』」

——ドシュッ。

「うっ……！！」

男の槍は、リズの腹部に深々と刺さっていた。

「すまんが、邪魔されたくないのよね」

「何て事を……ッ！！私を——」

「確かに今君に重傷を負わせたな、我らがマドンナ、ミス・オーステン」

「……なぜ私の名前を？」

答える代わりに、男はフードを外した。

黒髪にグレーの瞳、左頬に剣の刺青、そして右目のまぶたからまっすぐに下りた、刀傷。

「あなたは…うあああつ！！」

言葉の続きを拒絶する意思で、槍を勢い良く引き抜いた。傷口から鮮血が飛び散る。

「わざと急所は外し、夢幻穿孔^{マジック}の特殊能力は発動させなかった。——大丈夫だ、全てうまくいけば、もう誰も傷つかない。」

夢幻穿孔を解除し、フードをかぶりなおして背を向けた。

「だからせいぜい、邪魔をしないように気を付けろ」

耳に入る音声での、返答は無い。

それでも振り向くことなく、男は門に向かって歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3321b/>

マジカル・パニック ～杖とローブと魔術式！～

2010年10月11日00時15分発行